

幼児の社会道徳的発達環境としての母親のしつけの態度

○首藤 敏元 二宮 克美

(埼玉大学教育学部) (愛知学院大学情報社会政策学部)

目的

子どもは仲間間のトラブルや大人からの指示・命令などの社会的相互作用を読み取ることで社会道徳的認知を発達させる。親は直接子どもとかわることで子どもの社会道徳的認知の発達に必要な社会的文脈を作り出しており、親のかかわり方は子どもの社会道徳的発達の重要な情報源となる。首藤(1997)は、母親が幼稚園教師に幼児の行動の無条件の受容を期待しているのではなく、幼児の直面する状況の性質(領域)に即した働きかけ方を期待していることを示した。本研究は、①母親が幼児のさまざまな社会道徳的逸脱場面にとどのような態度でかわらうとするのかを検討すること、および②母親が日常生活の中で幼児に与える社会的ルールを調査することを目的とした。

方法

1.調査協力者 浦和市内の私立S幼稚園年中児(女児64名、男児59名)と年長児(女児54名、男児44名)の母親合計221名が調査に協力した。
2.材料と手続き 幼児の社会道徳的逸脱行動として合計24場面が設定された。道徳領域からは反社会的な行為4場面(攻撃、いやがらせ等)、慣習領域からは生活習慣の違反4場面(食べ歩き、挨拶なし等)、個人領域からは自由意志4場面(どろんこ遊び、遊び方等)が設定された。また、個人領域と道徳領域あるいは慣習領域の両方の要素を持つと考えられるものとして4場面(向社会的に行動しない場面:分与しない、慰めない等)、道徳領域と慣習領域の両方の要素を持つと考えられるものとして4場面(公衆道徳:公共物を片づけられない、電車で大声等)、個人領域に含まれるものの自己の身体を害するおそれのある4場面(自己管理:はさみで遊び、レトルト食品等)が追加された。母親は各場面の行為者が自分の子どもであることを仮定して、各場面でのかかわり方を「気にしない」、「見守る」、「やさしく」、「つよく」の中からひとつ選択した。さらに、母親の働きかけに幼児が反抗・反発した場合のかかわり方を「あきらめる」、「強い調子で」、「きびしく」の中からひとつ選択した。

母親の与える日常の社会的ルールは、言葉や態度で禁止したり制限したりしている「禁止」のルールと言葉や態度で指示したり促したりしている「要請」のルールごとに集められた。母親はそれぞれについて具体的にいくつでも記述することができた。

結果と考察

主な結果は次のとおりである。

1.全体傾向について 「気にしない」を1点~「つよく」を4点として得点化し、下位領域(反社会、向社会、生活習慣、公衆道徳、自由意志、自己管理)ごとに4場面の合計得点を計算した。2(性)×6(下位領域)のANOVAの結果、下位領域の主効果のみが有意になった($p<.001$)。多重比較の結果、母親のかかわりの強さは、反社会>公衆道徳=自己管理>生活習慣>向社会>自由意志の順であった。幼児の反抗・反発に対するかかわりの強さに関する結果もほぼ同様なものであった。これらの結果は、母親が場面の性質(他者や自己に与える悪影響の有無)に即してしつけの態度を変えていることを示している。

2.場面ごとの傾向について 24場面すべてにおいて、かかわりの強さに関する4つの選択肢への回答パターンと反抗・反発に対する3つの選択肢への回答パターンは、いずれも期待値と有意に異なることが示された。また、性差はすべて有意ではなかった。場面ごとの選択パターンから、母親は他者が身体的に傷つくおそれのある行為に対して最も厳しい態度で接すること、向社会的場面では生活習慣場面と同様に「やさしい」態度でかわらうとするものの、反抗・反発にあうと「あきらめる」選択が多いことなどが見出された。

3.日常の社会的ルールについて 母親は幼児に日常生活の中で多種多様なルールを提示していることが示された。詳細な結果は当日提示される。

本研究は、平成9年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(課題番号:09610104「子どもの社会道徳的判断における大人の権威の受容、拒否と自己決定」研究代表者:首藤敏元)の一部として実施された。